ずいひつ

結核患者の「療養文化」活動

結核研究所
名誉所長 森亨

戦後から1950年代，結核は相変わらず「亡国病」であった。1955年の結核死亡率は人口十万対146で現在の約100倍，結核関連の医療費も国民総医療費の27％を占めていた。化学療法は導入されたばかり，他の治療法としてはせいぜい人工気胸，外科手術があるくらい，治療の主役は昔ながらの「大気・安静・栄養」を基礎とした「療養」だった。その場は療養所，それも長いほど良い。1967年には平均在院期間は416日，だから1年を超える入院期間はざらだった。これら入所中の，あるいは退所（「出所」ではありません）後も在宅で療養を続ける患者のなかには，俳句や短歌などの文芸活動に生きがいを見出し，精を出す者も少なくなかった。一人で楽しむほか，同じ療養所の仲間と同人誌を出したり，他の療養所の同好者と文通や同人誌の交換などをしたりしていた。

1946年に，結核患者に結核の正しい知識を伝え，治療の効果を最大限にすることを目指して月刊誌「保健同人」が発刊された。当初その事務局は結核予防会内にあった。創刊の辞は編集長（大渡順二，敬称略，以下同じ）のことばで「道はただ一つ，結核を科学しませう」と結ばれている。自分も結核を病んだ創業者の，この時代の知識人としてのセンスと使命感を感じる。同誌には当初から患者の文芸作品を掲載する欄が設けられ，土岐善麿のような複数の有名人が選評を寄せていた。また同誌は作品の発表のみでなく，同好の仲間の交流の場としての役割も果たし，文通のきっかけを提供した。（「保健同人」は1964年「暮らしと健康」に改変，総合健康誌となる）

ラジオでも，NHKでは「療養所の時間」で1944年から傷痍軍人を対象に慰問，趣味（短歌，音楽など）の番組が始まったが，これが戦後（1945年10月）「療養の友」に改編，対象を在宅療養中の一般患者にも広げ，結核の予防・療養に対する正しい指導を始めた。その後「療養の時間」となり，1964年ごろまでは継続された。

結核予防会の機関誌「複十字」（1955年創刊）でも，1960年代後半からこうした療養者の活動に注目し，「療養文芸紹介時評」（古谷綱武）の連載を開始した。これはその後10年以上続く。さらに「生活記録作品」募集，優秀応募作品の表彰（療養文芸賞）などを1980年代まで続けた。1972年の沖縄復帰の後は琉球結核予防会（沖縄県支部の前身）会長であった川平朝申の「沖縄の民話」を14号にわたって連載した。

文芸活動よりひろく，療養者の文化的活動の特異なものとしてエスペラント（運動）があった。外国人との交流は，英米人だけに有利な英語など特定の自然語で行うのではなく，公平中立な人工語（エスペラント語）で行うべきだ，という思想に基づき，日本でも約100年前から組織的な普及活動が行われている（参照：日本エスペラント協会https://www.jei.jp）。この言語，思想が保健同人などを介して，全国の療養所内外の「療友」の間に拡散した。エスペラントを用いて英語圏以外の外国人と文通をする，その様子を「保健同人」に投稿し仲間を全国に作る，同じ療養所内でサークルを組織して語学を勉強しあう。このようなことが多かれ少なかれ1960年代までは全国の療養所で行われてた。山形県にあった，国立療養所左沢（あてらざわ）光風園に入院中にエスペラント活動をしていた長岡二郎は，1957年同人誌「Verda Sanatorio」（緑の療養所，緑はエスペラントのシンボルカラー）を創刊した。1957年に退所した後も，エスペラントを通じた全国の療養者・同志との交流，機関誌も1986年第62号まで続けた。この時点（1986年）で日本の結核は死亡率人口十万対3.4，1955年の40分の1，入院患者も並行して減少，また平均在院日数は150日を割り，患者が病床で「文芸」に親しむ暇も，また仲間もなくなった。

さて，私は高校時代からエスペラント運動にかかわっていたが，その中で1961年，大学入学の年に，上記の長岡に巡り合った。夏休み，山形の彼の自宅を訪問したが，昼過ぎ2時頃になると，長岡は「安静時間だから」といって畳のうえにゴロンと横になる。促されて私もゴロン。2列に横になっていろいろエスペラントや結核療養の話を聞いた。その後医学専門課程に進むと，結核（医療・対策）に魅入られ，私の中では結核とエスペラントのカップリングが作られた。将来は療養所で結核患者の治療をしながら患者のエスペラント運動を応援しよう――。実際に結核研究所に入職したのが1968年，「働きながら結核を治す」を全国に先駆けて目指していたわが結核研究所付属療養所（現複十字病院）には残念ながらエスペラントのサークルどころか，一般の文芸活動もほぼなくなっていた。これはある意味で致し方のない，さらに言えば結核の消退の結果とみれば喜ばしいことであったのかもしれない。

第13回本部・総合健診推進センター合同業績発表会開催

2月3日（土），総合健診推進センター（総健）3階ドック待合室にて標記発表会をハイブリッド形式で開催しました。本部3題・総健5題の計8題の演題発表があり，各部署の取り組みが披露されました。また，演題発表の後，尾身理事長より特別講演「新型コロナこれまで，これから」がありました。

演題発表

総健 宮崎所長
（総評）

本部 工藤代表理事
（閉会挨拶）